『親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性と グループの所属・グループの特徴に及ぼす影響』

永井　里奈（加納小学校）
石田　靖彦（愛知教育大学学校教育講座）

Relationship between Two Affiliation Motives, Directionality toward Peer Group, and Characteristic of Peer Group.

Rina NAGAI (Kano Elementary School)
Yasuhiko ISHIDA (Department of School Education)

要約　本研究の目的は、親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属有無・特徴に及ぼす影響を検討することであった。仮説として、1. 親和欲求と拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高い、2. 親和欲求と拒否不安が高い生徒が所属するグループは、構成人数が少なく、仲間集団の凝集性・閉鎖性が高い、3. 仮説 1 と仮説 2 は男子より女子の方がより顕著に認められることを設定した。A 県内の公立中学校の生徒 546 名（男子 266 名、女子 254 名、無回答 26 名）を対象に、親和動機、仲間集団指向性、グループの所属有無・構成、仲間集団の特徴について質問紙調査を行った。親和欲求の高低と拒否不安の高低の 2 要因の分散分析を行った結果、男女ともに拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いこと、親和欲求が高い生徒は仲間集団の凝集性が高いことが明らかとなった。このことから、生徒たちが排他性や閉鎖性の低い、開かれた仲間集団を形成するためには、拒否不安を低減し、親和欲求を高めることが重要であると示唆された。

キーワード：中学生、親和欲求、拒否不安、仲間集団指向性、仲間集団の特徴

1. 問題と目的

学校生活において、学級内の人間関係は重要である。これまでの研究で、友人関係が授業への取り組みや学習意欲、学校適応感に強く影響を与えていることが指摘されている（石田, 2003; 石田, 2009; 石田・吉田, 2015; 大久保, 2005）。友好的な人間関係を成立させ、それを維持したいと思う動機づけである親和動機は、実際の友人関係や社会的行動にも大きく影響を与えると考えられ、これまでに様々な研究がされてきた（榎本, 2000; 佐藤, 1995; 杉浦, 2000）。

これまでの親和動機の研究では、親和動機には異なる 2 つの側面があることが指摘されている（杉浦, 2000）。ひとつは「親和傾向（affiliative tendency）」で、拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える欲求と定義される。もうひとつは「拒否不安（sensitivity to rejection）」で、分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表わし、他者からの拒否に対する恐れの要素を持つ欲求と定義される。なお、杉浦（2000）では、前者を「親和傾向」としているが、本研究では人と一緒にいたいという欲求であることから「親和欲求」と呼ぶことにする。

親和欲求は、友人関係を支える要素の 1 つであり、中学生・高校生・大学生で一貫して男女ともに強く持っている（榎本, 2000）。親和欲求を強く持つことで、友人との関わりの中で生じる孤独感や不信感を減少させ、友人と信頼し合える対人関係の形成を促し、友人関係満足感を高める（杉浦, 2000; 笠原・島谷, 2012）。友人と仲良くなりたいという気持ちが、友人に対する信頼感を高め、深い友人関係を形成することへつながるといえる（佐藤, 1995）。

一方で、「拒否されたくない」という気持ちは周りに気を使って自分を抑える行動をもたらし、自由に行動できないといった気詰まりな気持ちを引き起こす（落合・佐藤, 1996）。つまり、拒否不安による友人関係の形成は、よりよい友人関係であるといえない。常に周りを気にして生活するためストレスも多く、友人関係の問題へと発展しやすいと考えられる。

さらに、杉浦（2000）は、中学生では親和欲求と拒否不安とが分化していない状態であり、親しい関係を維持したいと思うと、必然的に拒否不安も強くなってしまう

と述べている。拒否不安を克服することは重要であるが、メールやSNSなどにより、常に自分からは見えないところで友人同士がコミュニケーションをとれる状況であるため、現代の中学生にとって難しい問題であると考えられる。友人は悩みを共感しあえる、信頼のおける相手だが、同時にリスクをはらんだ関係にもなっているのである（榎本, 1999, 2000; 木村, 2016）。

また、親和動機は男女差が大きい。親和欲求と拒否不安ともに、女子の方が男子よりも高い（榎本, 1999, 2000）。三島（1995, 1997）は、すでに小学校高学年において、男子よりも女子の方が友だちからどう見られているかを気にすることを明らかにしている。このような親和欲求と拒否不安の男女の違いは友人関係のあり方にも影響を及ぼすと考えられる。女子は友人と理解・共感・共有しあう、親密な関係を作ることが多いのに対し、男子は友人と自分は異なる存在であると認識し、活動を共有することが多い（榎本, 1999; 落合・佐藤, 1996）。女子は友人との親密な関係による安心感を得ることができる一方で、自分らしさを出せない疎外感に苦しまなくてはならない。それに対して男子は友だちと一緒にいられれば自分らしさを出せないことは気にならないため、拒否不安は問題にならないのである（杉浦, 2000）。

近年の中学生の友人関係は、同性の仲間集団を中心に形成されることが特徴としてみられ、親和動機はこのような仲間集団に影響を及ぼすと考えられる。石田・小島（2009）は、8 割を超える中学生が仲間集団に所属していることを指摘しており、多くの中学生は特定の仲間集団に所属しながら学校生活を送っているといえる。中学生は行動基準が教師から仲間集団規範へ移行していく時期でもあり、仲間集団は中学生の考え方や行動に大きく影響を及ぼしている。しかし、この仲間集団は必ずしも安心感を抱けるものとは限らない（坂口, 1999）。グループ化することによって友人関係に悩む生徒は多く（三島, 1997）、「何かの理由でこのグループに入りそびれると、その 1 年間は文字通り『孤独地獄』を味わうことになる」（菅, 1994）ため、友人とは保身的なつきあい方をしなくてはならない（落合・佐藤, 1996）。上手く友人関係を築いているように見えても、心の中には不安な感情が常に渦巻いているのである。

三島（2008a）は、仲間集団に対する考え方や行動傾向について「仲間集団指向性」という概念を提唱している。仲間集団指向性とは、「仲間同士の結びつきが強く、仲間集団の成員の流動性が小さく、仲間と仲間以外のものに対する態度の違いが大きい仲間集団の成員が持つ指向性」と定義される。三島（2008a）は、同じ仲間集団に所属している親しい仲間と話をしたり、休み時間を一緒に過ごしたりするなどして、仲間集団を固定化しようとする指向性を「固定的な集団指向」とし、極めて親しい特定の仲間との親密な関係を背景に、その関係には属さない第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さを「独占的な親密関係指向」として、これら 2 つの因子により仲間集団への指向性が構成されることを示した。さらに、「独占的な親密関係指向」を強めることは、学級生活に対する適応感を低下させ、心身の健康状態が良好ではないことが示唆されている（三島, 2008a）。「固定的な集団指向」に関しても学級集団より仲間集団としてのまとまりの方が生徒により強く感じられるようになり、学級としての一体感よりも、個々の仲間集団に分かれているという雰囲気が強くなることが推測されている（三島, 2013）。このように仲間集団指向性は、仲間集団内だけでなく、生徒の学校生活にまで大きな影響を及ぼす指向性であるといえる。

親和動機と仲間集団指向性の関連については、男子より女子の方が親和欲求と拒否不安が高く（榎本, 1999, 2000）、独占的な親密関係指向も高いことから（三島・橋本, 2016）、人と親しくなりたいという親和欲求と、仲間から嫌われたくない、一人になりたくないという拒否不安の強さが、同じ仲間集団に所属していない第三者の排他性を高めている可能性が示唆される。特に、拒否不安については、他者からの拒否を恐れるが故に、仲間集団の結びつきを強めたいという感情が強まると考えられる。したがって、親和欲求と拒否不安が高いほど、仲間集団指向性は高くなると考えられる。

個人の仲間集団に対する考え方は、実際の仲間集団の形成・特徴にも大きく影響を与えると考えられる。石田（2002, 2003）は、男子では活動に基づいて集団が形成される傾向があるのに対し、女子では活動よりも「誰とその活動をするか」という情緒的なつながりをもとに集団が形成される傾向があることを指摘している。また、楠見（1986）は男子の仲間集団は比較的大きく、階層性の高い仲間集団を形成するのに対し、女子は少人数からなる相互に独立した集団を形成する傾向のあることを示している。女子は同じ仲間集団に所属する友人同士の親密性が強まることに安心感を抱くため、仲間集団の凝集性や閉鎖性が高まるといえる。

親和動機と仲間集団の特徴の関連について、石田・小島（2009）は仲間集団を形成する際、女子は男子より積極的な動機づけと消極的な動機づけの双方の動機づけによって形成される側面が強いことを指摘している。積極的動機の高い人は親和欲求が高いと推察され、また消極

的動機が高い人は拒否不安が高いことが推察される。このように考えると、女子の方が男子よりも親和欲求と拒否不安が高い（榎本, 1999, 2000）ことと一致する。したがって、親和欲求と拒否不安が高いほど、グループは独立し、少人数で凝集性の高い閉鎖的な集団を形成すると予測される。

しかしながらこれまでは、親和動機の男女差、グループに所属している人のみを対象とした親和動機と仲間集団の関連の研究はみられる（杉浦, 2000; 石田・小島, 2009）が、グループの所属有無にかかわらず、特性としての親和動機と仲間集団指向性との関連についての研究はされていない。また、親和動機と仲間集団の特徴との関連の研究も少ない。

以上の議論から、本研究では親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属有無・特徴に及ぼす影響を検討する。仮説については、以下の通りである。

仮説 1：親和欲求と拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高い。

仮説 2：親和欲求と拒否不安が高い生徒が所属するグループは、構成人数が少なく、仲間集団の凝集性・閉鎖性が高い。

仮説 3：仮説 1 と仮説 2 は男子より女子の方がより顕著に認められる。

2. 方法

2.1. 調査対象者と調査時期

A 県内の公立中学校の生徒、中学 1 年生 185 名、2 年生 187 名、3 年生 174 名の計 546 名（男子 266 名、女子 254 名、無回答 26 名）から回答を得た。また、それぞれの分析において欠損値がある者は除いた。調査時期は、2019 年 10 月であった。

2.2. 調査手続き

調査対象校に対しては、書面にて調査目的と調査内容、個人情報の保護などについて説明し、校長の許可が得られた学校で調査を実施した。調査は担任に依頼し、集団場面で実施した。生徒に対しては、調査への協力は自由であること、調査は匿名で個人が特定されることはないこと、途中でやめたくなった場合はいつでもやめられること、得られた回答は研究以外には使用しないこと、教師は生徒の回答を見ないことなどを、質問紙に明記するとともに、担任を通じて説明してもらい、「調査に協力する」と回答した生徒のみを分析の対象とした。また調査用紙の回収は教師が生徒の回答を見ないように封筒に入れて回収した。

2.3. 調査内容

(1) 親和動機尺度

杉浦（2000）の親和動機尺度 18 項目を使用した。それぞれの項目に対し、自分に「あてはまらない（1 点）」～「あてはまる（5 点）」の 5 件法で回答を求めた。

(2) 仲間集団指向性尺度

三島・橋本（2016）の仲間集団指向性尺度を参考にして、現代の子どもの実態に合わせて表現を若干修正した 13 項目を使用した。修正については、実際の仲間集団とのかかわり方ではなく、どのような仲間集団を指向するかという「指向性」であることを明確にするために、「学校で、休み時間に話をしたりして遊ぶ相手は決まっている」を「学校で、休み時間に話をしたりして遊ぶ相手は同じ友だちがよい」や、「学校の休み時間、仲の良い友だちと一緒にトイレに行くことがある」を「学校の休み時間、仲の良い友だちと一緒にトイレに行きたい」等、文末を変更した。それぞれの項目に対し、自分に「あてはまらない（1 点）」～「あてはまる（5 点）」の 5 件法で回答を求めた。

(3) クラスでのグループの所属有無と構成

クラスでのグループの所属有無について「グループ（2 人以上で一緒に行動する友人の集団）に所属している」「グループに所属していない」「わからない」の中から 1 つ回答を求めた。また「グループに所属している」と答えた人には、グループの構成人数（男子と女子の人数）についても回答を求めた。グループの構成人数については、「わからない」という項目も作成した。

(4) グループの特徴

石田・小島（2009）の仲間集団の特徴尺度を使用した。それぞれの項目に対し、自分が所属しているグループに「あてはまらない（1 点）」～「あてはまる（5 点）」の 5 件法で回答を求めた。

(5) グループについての自由記述

クラスの中にグループがあることをどう思うか、自由記述で回答を求めた。

3. 結果

3.1. 尺度の検討

(1) 親和動機尺度の検討

親和動機に関する 18 項目について主因子法による因子分析を実施し、プロマックス回転を行った。その結果、杉浦（2000）と同様の 2 因子が抽出されたため、杉浦（2000）にならい、第Ⅰ因子 9 項目を「拒否不安」、第Ⅱ因子 9 項目を「親和欲求」とし、下位尺度を構成した。各尺度についてα係数を算出したところ、「拒否不安」はα＝.88、

「親和欲求」はα ＝.90 で、十分な信頼性が得られた。そこで、各因子の項目得点を合計して下位尺度得点を算出し、拒否不安得点、親和欲求得点とした。

(2) 仲間集団志向性尺度の検討

仲間集団指向性に関する 13 項目について主因子法による因子分析を実施し、プロマックス回転を行った。その結果、三島・橋本（2016）と同様の 2 因子が抽出されたため、第Ⅰ因子を「固定的な集団指向」、第Ⅱ因子を「独占的な親密関係指向」とした。当該因子のみに絶対値で.35 以上の負荷を有することを基準とし、下位尺度を構成した。各尺度についてα係数を算出したところ、「固定的な集団指向」はα ＝.79 であったが、「独占的な親密関係指向」については「遊び相手がいつも同じだとつまらない」を削除した方が高い内的一貫性が得られたため、1 項目を削除した。その上で、もう一度α係数を算出したところ、「独占的な親密関係指向」はα ＝.74 であった。最終的には、「固定的な集団指向」は 6 項目、「独占的な親密関係指向」は 4 項目であった。そこで、各因子の項目得点を合計して下位尺度得点を算出し、固定的な集団指向得点、独占的な親密関係指向得点とした。

(3) 仲間集団の特徴尺度の検討

仲間集団の特徴に関する 16 項目について主因子法による因子分析を実施し、プロマックス回転を行った。その結果、石田・小島（2009）と同様の 3 因子が抽出されたため、第Ⅰ因子 6 項目を「仲間集団の階層性」、第Ⅱ因子 4 項目を「仲間集団の凝集性」、第Ⅲ因子 6 項目を「仲間集団の閉鎖性」とした。各尺度についてα係数を算出したところ、「仲間集団の階層性」はα ＝.72、「仲間集団の凝集性」はα ＝.75、「仲間集団の閉鎖性」はα ＝.70 であった。そこで、各因子の項目得点を合計して下位尺度得点を算出し、仲間集団の階層性得点、仲間集団の凝集性得点、仲間集団の閉鎖性得点とした。

3.2. 性差の検討

(1) 親和動機と仲間集団指向性における性差

親和動機尺度得点（拒否不安・親和欲求）、仲間集団指向性尺度得点（固定的な集団指向・独占的な親密関係指向）の平均値と標準偏差を男女別に求め比較した（表 1）。

その結果、「拒否不安」（$t(518)=3.11, p<.01$）、「親和欲求」（$t(508.71)=3.53, p<.001$）、「独占的な親密関係指向」（$t(506.31)=8.92, p<.001$）において有意差が認められ、いずれも男子より女子の方が有意に高いことが示された。これまでの研究でも、男子より女子の方が親和欲求と拒否不安、独占的な親密関係指向が高いことが示されており（榎本, 1999, 2000; 三島・橋本, 2016）、同様の結果といえる。ただし、「固定的な集団指向」（$t(518)=1.17$, *ns.*）では、有意差は示されなかった。

表 1　男女別の親和動機と仲間集団指向性の平均値

	男子	女子
拒否不安	32.61 (7.22)	34.51 (6.71)
親和欲求	34.18 (7.60)	36.34 (6.33)
固定的な集団指向	21.81 (4.81)	21.33 (4.42)
独占的な親密関係指向	8.79 (3.51)	11.69 (3.90)

(2) 仲間集団の構成と仲間集団の特徴における性差

性別とグループの所属有無をクロス集計表で示した（表 2）。男女のグループに所属している人数の違いについてχ^2検定を行ったところ、有意な結果が示された（$\chi^2(2)=19.47, p<.001$）。残差分析の結果、男子のグループに所属している割合は、期待値にくらべて有意に少なく（$p<.001$）、女子のグループに所属している割合は有意に多い（$p<.001$）ことが示された。分からないと回答した人数については、男子の割合は有意に多く（$p<.001$）、女子は有意に少ない（$p<.001$）ことが示された。

表 2　男女別のクラス内でのグループの所属有無

	所属している	所属していない	分からない
男子	128 (48.1%)	15 (5.6%)	123 (46.2%)
女子	166 (65.4%)	18 (7.1%)	70 (27.6%)
全体	294 (56.5%)	33 (6.3%)	193 (37.1%)

次に、「グループに所属している」と回答した 294 名（男子 128 名、女子 166 名）を対象に、グループの構成人数と仲間集団の特徴（仲間集団の階層性・仲間集団の凝集性・仲間集団の閉鎖性）の平均値と標準偏差を男女別に求め比較した（表 3, 表 4）。その結果、男子は男子の人数が女子の人数よりも多いグループを構成し（$t(69.68)=13.64, p<.001$）、女子は女子の人数が男子の人数よりも多いグループを構成することが示された（$t(182)=10.48, p<.001$）。また、グループ全体の人数については、女子より男子の方が有意に多いことが示された（$t(81.00)=3.93, p<.001$）。仲間集団の特徴については、「仲間集団の凝集性」（$t(243.78)=0.91$, *ns.*）では有意差は示されなかったが、「仲間集団の階層性」（$t(292)=4.65, p<.001$）と「仲間集団の閉鎖性」（$t(292)=2.86, p<.01$）において有意差が認められ、いずれも男子の方が女子にくらべて有意に高いことが示された。グループ全体の人数につい

ては、これまでの研究でも女子より男子の方が多いことが示されており（石田・小島, 2009）、同様の結果といえる。しかし、仲間集団の特徴については、女子よりも男子の方が仲間集団の閉鎖性が低いことが示されており（石田・小島, 2009）、異なる結果といえる。

表 3　男女別のグループ構成人数

	男子	女子
男子の人数	5.34（3.11）	0.14（0.57）
女子の人数	0.51（1.98）	3.55（1.85）
合計人数	5.85（4.32）	3.69（1.81）

表 4　男女別の仲間集団の特徴の平均値

	男子	女子
仲間集団の階層性	17.38（4.56）	14.90（4.49）
仲間集団の凝集性	16.60（2.95）	16.89（2.43）
仲間集団の閉鎖性	13.67（4.33）	12.30（3.89）

3.3. 親和動機と仲間集団指向性との関連

2 つの親和動機である親和欲求と拒否不安について男女別に平均値を算出し、それぞれ親和欲求（高低）×拒否不安（高低）の 4 群に分類した。表 5～表 8 に各群の仲間集団指向性尺度の固定的な集団指向得点、独占的な親密関係指向得点を示した。

まず男子について固定的な集団指向得点を従属変数、親和欲求（高低）と拒否不安（高低）を独立変数とする 2 要因の分散分析を行ったところ、交互作用はみられなかった（$F(1, 262) = 0.02$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなかった（$F(1,262) = 0.79$, *ns.*）が、拒否不安の主効果が有意であった（$F(1,262) = 7.64$, $p < .01$, 偏$\eta^2 = .028$）。独占的な親密関係指向得点についても、同様の分析を行ったところ、交互作用は見られなかった（$F(1,262) = 0.46$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなかった（$F(1,262) = 0.50$, *ns.*）が、拒否不安の主効果は有意であった（$F(1,262) = 5.55$, $p < .05$, 偏$\eta^2 = .021$）つまり、男子では、拒否不安得点が高い人は固定的な集団指向得点と独占的な親密関係指向得点が高いことが示された。

女子についても、固定的な集団指向得点を従属変数とする 2 要因の分散分析を行ったところ、交互作用はみられなかった（$F(1, 250) = 2.32$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなかった（$F(1,250) = 3.73$, *ns.*）が、拒否不安の主効果は有意であった（$F(1, 250) = 30.50$, $p < .001$, 偏$\eta^2 = .109$）。独占的な親密関係指向についても、交互作用は見られなかった（$F(1,250) = 1.55$, *ns.*）が、親和欲求の主効果は有意であり（$F(1,250) = 6.51$, $p < .05$, 偏$\eta 2 = .025$）、拒否不安の主効果も有意であった（$F(1, 250) = 19.41$, $p < .001$, 偏$\eta^2 = .075$）。つまり、女子では親和欲求得点が高い人は独占的な親密関係指向得点が高く、拒否不安得点が高い人は固定的な集団指向得点と独占的な親密関係指向得点が高いことが示された。

表 5　各群の固定的な親密関係指向の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	22.87（4.62）	22.36（3.79）
	低群	21.12（5.31）	20.45（4.94）

表 6　各群の独占的な親密関係指向の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	9.54（3.47）	8.86（3.25）
	低群	8.06（2.41）	8.05（3.85）

表 7　各群の固定的な集団指向の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	22.13（4.28）	24.15（4.06）
	低群	19.78（4.70）	20.02（3.88）

表 8　各群の独占的な親密関係指向の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	13.22（3.88）	12.56（3.99）
	低群	11.62（3.59）	9.70（3.13）

3.4. 親和動機とグループの構成人数との関連

親和欲求の高低と拒否不安の高低を組み合わせた 4 群についてグループの構成人数を男女別に算出した（表 9, 表 10）。

男子について、グループの構成人数を従属変数、親和欲求（高低）と拒否不安（高低）を独立変数とする 2 要因の分散分析を行ったところ、交互作用はみられなかった（$F(1,64) = 1.36$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなく（$F(1,64) = 1.48$, *ns.*）、拒否不安の主効果も有意ではなかった（$F(1, 64) = 1.54$, *ns.*）。

女子についても、同様の分析を行ったところ、交互作用は見られなかった（$F(1, 112) = 1.41$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなく（$F(1, 112) = 0.64$, *ns.*）、拒否不安の主効果も有意ではなかった（$F(1, 112) = 0.06$, *ns.*）。つまり、男女とも、親和欲求や拒否不安の高低はグループ

の構成人数とは関連のないことが示された。

表 9　各群のグループの構成人数の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	5.39（3.41）	5.33（1.86）
	低群	8.50（8.24）	5.43（2.90）

表 10　各群のグループの構成人数の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	3.63（1.43）	3.78（1.40）
	低群	4.17（3.31）	3.43（1.32）

3.5. 親和動機と仲間集団の特徴との関連

グループに所属していると回答した 294 名（男子 128 名、女子 166 名）を対象に、2 つの親和動機である親和欲求と拒否不安について男女別に平均値を算出し、それぞれ親和欲求（高低）×拒否不安（高低）の 4 群に分類した。各群の仲間集団の階層性、凝集性、閉鎖性得点を、男子については、表 11～表 13 に、女子については、表 14～16 に示した。

表 11　各群の仲間集団の階層性の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	18.44（4.51）	16.50（3.25）
	低群	16.71（4.06）	15.87（5.02）

表 12　各群の仲間集団の凝集性の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	17.45（2.49）	15.79（2.33）
	低群	17.82（1.91）	14.48（3.40）

表 13　各群の仲間集団の閉鎖性の平均値（男子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	13.62（4.56）	14.14（2.98）
	低群	12.06（4.81）	14.45（3.99）

まず男子について仲間集団の階層性得点を従属変数、親和欲求（高低）と拒否不安（高低）を独立変数とする 2 要因の分散分析を行ったところ、交互作用はみられなかった（$F(1, 124) = 0.34$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなく（$F(1, 124) = 2.16$, *ns.*）、拒否不安の主効果も有意ではなかった（$F(1, 124) = 1.57$, *ns.*）。仲間集団の凝集性については、交互作用は見られなかった（$F(1, 124) = 2.21$, *ns.*）。拒否不安の主効果は有意ではなかった（$F(1, 124) = 0.69$, *ns.*）が、親和欲求の主効果は有意であり（$F(1, 124) = 19.88$, $p < .001$, 偏 $\eta^2 = .138$）、親和欲求が高い人は凝集性の高い仲間集団を形成していることが示された。また、仲間集団の閉鎖性についても、交互作用は見られなかった（$F(1, 124) = 1.06$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなく（$F(1, 124) = 2.56$, *ns.*）、拒否不安の主効果も有意ではなかった（$F(1, 124) = 0.47$, *ns.*）。つまり、男子では、親和欲求が高い人は凝集性の高い仲間集団を形成しているが、拒否不安と仲間集団の特徴との関連がないことが示された。

表 14　各群の仲間集団の階層性の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	14.45（4.66）	16.65（4.45）
	低群	14.79（4.76）	14.80（3.97）

表 15　各群の仲間集団の凝集性の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	17.66（1.82）	16.22（2.54）
	低群	17.11（2.41）	15.84（2.83）

表 16　各群の仲間集団の閉鎖性の平均値（女子）

		親和欲求	
		高群	低群
拒否不安	高群	11.69（3.28）	15.17（3.33）
	低群	10.43（4.41）	12.95（3.86）

女子についても 2 要因の分散分析を行ったところ、仲間集団の階層性については、交互作用はみられなかった（$F(1, 162) = 2.07$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意ではなく（$F(1, 162) = 2.11$, *ns.*）、拒否不安の主効果も有意ではなかった（$F(1, 162) = 1.00$, *ns.*）。仲間集団の凝集性については、交互作用は見られなかった（$F(1, 162) = 0.05$, *ns.*）。拒否不安の主効果は有意ではなかった（$F(1, 162) = 1.39$, *ns.*）が、親和欲求の主効果は有意であり（$F(1, 162) = 11.74$, $p < .01$, 偏 $\eta^2 = .068$）、親和欲求が高い人は凝集性の高い仲間集団を形成していることが示された。また、仲間集団の閉鎖性についても、交互作用は見られなかった（$F(1, 162) = 0.59$, *ns.*）。親和欲求の主効果は有意であり（$F(1,$

162) = 23.32, $p < .001$, 偏$\eta^2 = .126$)、拒否不安の主効果も有意であった（$F(1, 162) = 7.82, p < .01$, 偏$\eta^2 = .046$）。つまり、女子では、拒否不安が高い人は閉鎖性の高い仲間集団を形成し、親和欲求が高い人は凝集性が高く、閉鎖性の低い仲間集団を形成していることが示された。

4. 考察

4.1. 親和動機と仲間集団指向性との関連

親和動機は男女で大きな違いが示された。親和動機における男女差の分析結果から、女子は男子にくらべて、人と仲良くなりたいと考える親和欲求も、分離不安から人と一緒にいたいと考える拒否不安も有意に高いことが示された。従来の研究でも、親和欲求と拒否不安ともに、女子の方が男子よりも高いことが指摘されており（榎本, 1999, 2000）、本研究の結果はそれらの知見と一致する。

仲間集団志向性については、女子は男子にくらべて、第三者に対する排他的な考え方や行動傾向の強さを示す独占的な親密関係指向のみ有意に高いことが示された。これまでの研究でも、男子より女子の方が独占的な親密関係指向が高いことが示されており（榎本, 1999, 2000; 三島・橋本, 2016）、本研究の結果はそれらの知見と一致する。一方で、仲間集団を固定化しようとする固定的な集団指向については、男女の差は認められなかった。三島・橋本（2016）でも、本研究と同様の結果であった。つまり、仲の良い友だちと一緒に行動したい気持ちに性差はないが、異なる仲間集団の人を排除しようという気持ちは男子より女子の方が強いことが示唆された。

親和動機と仲間集団志向性との関連については、男女ともに拒否不安が高い人は固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いことが示された。人から拒否されることへの不安が、仲間集団の固定化の傾向、第三者の排他性に影響を及ぼすといえる。これまでの研究では、中学生の女子は、内面の類似性の確認に固執する傾向が強くみられ（有倉, 2011）、友人関係の不安がこのような類似性への固執や同調性の高さにつながることを明らかにしてきた（本田・梶原・堀川・森恵・一期崎, 2013）。しかし、女子に限らず男女ともに、友人関係の不安をもつ生徒は、第三者を排除することで、友人関係の安心感を得たい気持ちがあるということが明らかとなった。

また、女子では親和欲求が高い人ほど独占的な親密関係指向が高いことが示されたが、男子では親和欲求と独占的な親密関係指向との関連はみられなかった。杉浦（2000）は、中学生では親しい関係を維持したいと思うと、必然的に拒否不安も強くなってしまうことを述べており、女子は常に友人と親しくありたいという気持ちが、拒否不安を高め、独占的な親密関係指向に影響を及ぼしていると考えられる。一方で、男子は人と親しくなりたいという気持ちが第三者の排他性に影響を与えていないことから、男子は親和欲求よりも人から嫌われたくない拒否不安の方が独占的な親密関係指向に強い影響を与えることが明らかになった。石田（2002）は、女子では「誰とその活動をするか」という情緒的なつながりをもとに集団が形成される傾向があるのに対し、男子では活動に基づいて集団が形成される傾向があることを指摘している。つまり、女子は、親しい友人関係の「維持」を目的とするが、男子は活動そのものを目的とし、その場面限りの「友人と親しくなりたい」気持ちであるため、親和欲求が独占的な親密関係指向に影響を与えないと考えられる。佐藤（1995）は、友人と仲良くなりたいという親和欲求が、友人に対する信頼感を高め、深い友人関係を形成することへつながると指摘しており、親和欲求はよりよい友人関係を築くために必要である。したがって、男女ともに拒否不安を低減させることが、第三者の排他性を低減させることにつながるといえる。

さらに、男女ともに親和欲求と固定的な集団指向との関連はみられなかった。このことから、仲間集団の固定化は、親しくなりたいという気持ちではなく、一人になりたくないという仲間からの拒否不安によって起こる可能性が示唆された。友人関係で悩んだり、孤立したりすることへの不安が募るほど、仲間集団の固定化は高まるといえる。したがって、親和欲求よりも拒否不安の方が、仲間集団に対する考え方や行動傾向に影響を及ぼすと考えられる。

以上より、仮説 1「親和欲求と拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高い」については、男子では拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いことが支持されたが、親和欲求が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いことは支持されなかった。女子では拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いこと、親和欲求が高い生徒は、独占的な親密関係指向が高いことが支持されたが、親和欲求が高い生徒は、固定的な集団志向が高いことは支持されなかった。したがって、仮説 1 は男女とも部分的に支持された。

また仮説 3「仮説 1 と仮説 2 は男子より女子の方がより顕著に認められる」については、女子は親和欲求が高い生徒は、独占的な親密関係指向が高いことが認められたが、男子は認められなかった。このことから、男子より女子の方が、仮説 1 が顕著に認められており、仮説 3

は支持された。

4.2. 親和動機とグループの構成人数との関連

仲間集団に所属している生徒の割合は、全体で過半数を超えており、ある程度の中学生は特定の仲間集団に所属していることが示された。男子は「グループに所属しているのか分からない」と答えた割合が4割を超えており、女子よりも仲間集団に対する意識が低いことが推察される。「クラスの中にグループがあることをどう思うか」尋ねた記述回答の中には、「グループがよく分からない」「グループを気にしない（意識していない）」「複数のグループに（所属して）いる」という意見が男子でみられた。石田（2002）は、男子では活動に基づいて集団が形成される傾向があることを指摘しており、活動によって仲間集団を形成するため、グループの境界があいまいでいつも行動を共にする特定のグループを形成しにくいと考えられる。

また、グループの構成人数については、男子より女子の方が有意に少ないことが示された。これまでの研究でも、男子の仲間集団は比較的大きく、女子は少人数からなる集団を形成する傾向のあることが示されており（楠見, 1986; 石田, 2002, 2003; 石田・小島, 2009）、本研究の結果はそれらの知見と一致する。「クラスの中にグループがあることをどう思うか」を尋ねた記述回答の中には「悩みの相談をしたいから、グループは必要」や「気の合う友人との会話の方が楽しい」という意見が女子は多くみられた。先述したように、女子は情緒的なつながりをもとに集団が形成される傾向があるとされているが、本研究では、親和動機とグループの構成人数との関連はみられなかった。つまり、「親和欲求と拒否不安が高い生徒が所属するグループは、構成人数が少ない」という仮説 2 は支持されなかった。グループの構成人数については、性別による違いはあるものの、親和欲求と拒否不安との関連はないことが明らかとなった。

4.3. 親和動機と仲間集団の特徴との関連

仲間集団の特徴については、女子より男子の方が仲間集団の階層性と仲間集団の閉鎖性が有意に高いことが示された。これまでの研究では、女子より男子の方が仲間集団の閉鎖性が低いことが示されており（石田・小島, 2009）、異なる結果といえる。先述したように、男子は活動に基づいて集団を形成するのに対し、女子は情緒的なつながりをもとに集団を形成する傾向がある。活動に基づいて仲間集団を形成する場合、「誰と一緒か」ということは問題にならないため、閉鎖性は低くなることが予想されるが、男子の方が閉鎖性は高かった。この要因の一つとして、本研究の対象とした生徒の仲間集団に所属している割合が、従来の研究と比べて低いことが挙げられる。全体で過半数を超えてはいるものの、従来の研究では仲間集団に所属している割合が８割を超えており（石田・小島, 2009）、本研究の割合はそれよりも低かった。男子についてはは「グループに所属しているのか分からない」と答えた割合が４割を超えており、仲間集団に対する意識が低い生徒が多いといえる。そのような集団の中でも、「グループに所属している」と答えるということは、その生徒の仲間集団に対する意識が高く、所属している仲間集団は固定化している可能性が高い。したがって、男子の閉鎖性が高くなったと考えられる。

親和動機と仲間集団の特徴との関連については、男女ともに親和欲求が高い人は仲間集団の凝集性が高いことが示された。男女ともに、仲良くなりたいという気持ちが、仲間集団の結束を固くし、より親密さを高めるといえる。一方で、拒否不安と仲間集団の凝集性との関連はみられなかった。人から嫌われたくないという気持ちが強いほど、仲間集団内の親密性を高め、安心感を得ようとすると予想したが、異なる結果であった。このような結果については、拒否不安の高い生徒は、一人になりたくない不安から「とりあえず」仲間集団に所属している可能性が考えられる。菅（1994）は「何かの理由でこのグループに入りそびれると、その1年間は文字通り『孤独地獄』を味わうことになる」と指摘している。生徒にとって「仲間集団に所属している」という事実が重要なのであり、拒否不安は仲間集団内での関係性ではなく、仲間集団外との関係性にのみ影響を与える可能性が示唆された。

また、女子のみ拒否不安が高い人は仲間集団の閉鎖性が高く、親和欲求が高い人は仲間集団の閉鎖性が低いことが示された。拒否不安については、人から拒否されることへの不安が、独占的な親密関係指向という個人の気持ちだけでなく、実際の仲間集団の閉鎖性を高めることが明らかとなった。親和欲求については、仮説とは異なる結果であった。この要因として、特定の仲間集団だけでなく異なる仲間集団の人に対しても、仲良くなりたいという気持ちを持つことが、閉鎖性を低め、異なる仲間集団とも交流をする、開放性のある仲間集団を形成すると考えられる。

以上より、仮説 2「親和欲求と拒否不安が高い生徒が所属するグループは、構成人数が少なく、仲間集団の凝集性・閉鎖性が高い」については、男子では親和欲求が高い生徒が所属するグループは仲間集団の凝集性が高いことは支持されたが、親和欲求が高い生徒が所属するグ

ループは仲間集団の閉鎖性が高いこと、拒否不安が高い生徒が所属するグループは仲間集団の凝集性と閉鎖性が高いことは支持されなかった。女子では親和欲求が高い生徒が所属するグループは仲間集団の凝集性が高いこと、拒否不安が高い生徒が所属するグループは仲間集団の閉鎖性が高いことは支持されたが、親和欲求が高い生徒が所属するグループは仲間集団の閉鎖性が高いこと、拒否不安が高い生徒が所属するグループは仲間集団の凝集性が高いことは支持されなかった。したがって、仮説 2 は男女とも部分的に支持された。

また仮説 3「仮説 1 と仮説 2 は男子より女子の方がより顕著に認められる」については、女子は拒否不安が高い生徒が所属するグループは仲間集団の閉鎖性が高いことが認められたが、男子は認められなかった。このことから、男子より女子の方が、仮説２が顕著に認められており、仮説 3 は支持された。

4.4. 本研究から得られる教育的示唆

本研究では、親和欲求と拒否不安は仲間集団指向性や仲間集団の特徴に影響を及ぼしていることを明らかにした。これまでの研究で、親密で排他的なグループはいじめ問題を生じやすいことが明らかにされている（三島, 2003）。つまり、親和欲求と拒否不安は、現代社会で学校の問題として大きく取り上げられているいじめ問題にも影響を与える可能性がある。特に、人から嫌われたくないという拒否不安は、学級内でのいじめや孤立によって、被害者や周りの観衆、傍観者の拒否不安が高まり、さらに仲間集団指向性を高め、仲間集団の閉鎖性、凝集性を高め、いじめがエスカレートするという負の連鎖を起こしかねない。また、集団内で何か問題が起こっても、拒否不安からグループを離れることができず、さらに問題の深刻化が進む可能性も考えられる。このような拒否不安から回避するため、現代では SNS などを通じて友人と常に「つながる」ことで安心感を得ることも考えられるが、携帯依存症やネットいじめなど、新たな問題に発展する可能性も高い。

したがって、教師としては生徒の拒否不安を低減し、よりよい友人関係を築けるようにアプローチしていく必要があるだろう。文部科学省（2006）は「グループ内での児童生徒の人間関係の変化を踏まえ、学級経営やグループの指導の在り方、わけても班別指導について不断の見直しや工夫改善を行う必要がある」と指摘している。また、三島（2008b, 2016）は、教師が遠足やグループ学習などのグループを編成する際、学級内の仲間集団ではなく、それぞれの活動に応じたグループ編成を行うことが、仲間集団の排他性を低減させ、いじめ予防へつながることを指摘している。さらに、本研究では、親和欲求が高いほど、仲間集団の閉鎖性が低いことも明らかになった。生徒にとって仲間集団を形成することは、発達段階として自然なことである。その上で、仲間集団を形成することにより、生徒が友人関係で悩んだり、苦しんだりすることのないよう、生徒の人間関係を丁寧に観察、把握した上でのグループ編成を心掛けることが重要である。様々な人と関わる機会を作り、人と仲良くなることの楽しさを実感させ、人から嫌われることへの不安を少しずつ解消させていく。教師は、仲間集団ではなく学級全体が安心できる場所となるよう、児童生徒の不安を敏感に察知し、対応していくことが求められるのである。

4.5. まとめと今後の課題

本研究では、親和欲求と拒否不安が仲間集団指向性とグループの所属有無・特徴に及ぼす影響を検討した。その結果、男女ともに拒否不安が高い生徒は、固定的な集団指向と独占的な親密関係指向が高いこと、親和欲求が高い生徒は仲間集団の凝集性が高いことが明らかとなった。しかし、性別、親和動機以外にも、仲間集団指向性や仲間集団の特徴に影響を及ぼすものがあると考えられる。それを明らかにすることが、今後の課題であるといえる。

また、記述回答の中には、「グループになるのはいいが、ずっと固定しているとクラスの雰囲気が悪くなる」「クラスの中でグループを作ることによって、仲間外れやいじめが起こるのであればよくない」という意見が男女ともに多くみられた。自分が学校生活を安心して送るためにはグループは必要であるが、クラスという集団でまとまるためには、グループは良くないという考えを持っていることが分かる。つまり、個人的な仲間集団に対する考え方と、「学級」という枠組みの中での仲間集団に対する考え方が、異なる可能性がある。こうした考え方が実際の仲間集団の形成や学級の雰囲気に影響を与えていると考えられる。今後、個人的な友人関係の指向と、学級内での友人関係の指向の違いをさらに検討していく必要もあるだろう。

引用文献

榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, *47*, 180-190.

榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究, *48*, 444-45.

本田優子・梶原まどか・堀川ひかり・森恵美加・一期崎

直美 (2013). 中学生がとる同調行動と対人恐怖心性との関連　熊本大学教育学部紀要, *62*, 239-251.
石田靖彦 (2002). 面接法を用いた集団構造の把握―ソシオメトリック・データとの比較による信頼性・妥当性の検討　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, *51*, 93-100.
石田靖彦 (2003). 学級内の交友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, *52*, 147-152.
石田靖彦 (2009). 学校への適応を媒介する要因としての児童・生徒間関係　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, *55*, 130-109.
石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連―仲間集団の形成・所属動機という観点から　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, *58*, 107-113.
石田靖彦・吉田俊和 (2015). 友人との関係の親密さと友人の特徴が生徒の学習動機づけに及ぼす影響　愛知教育大学教育創造開発機構紀要, *5*, 133-140.
笠原華葉・島谷まき子 (2012). 中学生の親和欲求および対友人不安感情が友人とのつきあい方に及ぼす影響　昭和女子大学生活心理研究所紀要, *14*, 69-78.
木村晶子 (2016). 現代の若者たちの人間関係　藤女子大学人間生活学研究, *23*, 1-12.
楠見幸子 (1986). 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラールに関する研究　教育心理学研究, *34*, 104-110.
三島浩路 (1995). 集団内いじめの予防と解消　特別活動研究, *343 (9)* , 50-53.
三島浩路 (1997). 対人関係能力の低下といじめ　名古屋大学教育学部紀要（心理学）, *44,* 3-9.
三島浩路 (2008a). 仲間集団指向性尺度の作成―小学校高学年用　カウンセリング研究, *41*, 129-135.
三島浩路 (2008b). グループ編成の方法と児童の排他性の変化―小学 5・6 年生を対象にした調査から　日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 360.
三島浩路 (2013). 高校生の仲間集団と学級適応―仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連　中部大学現代教育学部紀要, *5*, 19-27.
三島浩路・橋本秀美 (2016). 仲間集団に対する指向性や学級雰囲気といじめの関連―中学 1 年生を対象とした調査の結果から　中部大学現代教育学部紀要, *8*, 9-17.
文部科学省 (2006). 学校におけるいじめ問題に関する基本的認識と取組のポイント　初等中等教育局児童生徒課
大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討　教育心理学研究, *53*, 307-319.
落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, *44*, 55-65.
坂口里佳 (1999). 「グループ化」とその行方　青少年問題, *46*, 16-21.
佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析　神戸大学発達科学部研究紀要, *3*, 11-20.
菅 佐和子 (1994). 女の子から女性へ思春期　女性のためのライフサイクル心理学　福村出版.
杉浦 健 (2000). 2 つの親和動機と対人的疎外感との関係―その発達的変化　教育心理学研究, *48*, 352-360.
有倉巳幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究　鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, *21*, 161-172.

付記

本研究を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。とくに貴重な時間を割いて質問紙調査にご協力いただきました中学校の先生方、生徒の皆様に、深く感謝申し上げます。